



2011年 11月号

滑稽俳句協会会長 八木 健氏 に聞く 37

紅緑偏「滑稽俳句集」を読み解く 29 (聞き手 高橋素子)

高橋 > 「白寿の処女詩集」と言われる、柴田トヨさんの初詩集「くじけないで」(飛鳥新社)が巷で話題になっています。売り上げ一五〇万部突破とも言われていますが、会長の人々に生きる喜びと笑いを与えて下さる滑稽句に、どこか似通っていると、私は思っています。ぜひ、始めにトヨさんの詩の一篇をご披露させてください。

「先生に」

私を おばあちゃん と 呼ばないで

「今日は何曜日?」「9+9は幾つ?」

そんな ばかな質問も しないでほしい

「柴田さん 西条八十の詩は 好きですか? 小泉内閣を どう思います?」

こんな質問なら うれしいわ

会長 > トヨさんは素直な心をそのまま綴りましたね。詩の書き方も手本があるわけではなく、気持ちを吐露して語りかけるというスタイルで、口語俳句に通じるものがあります。滑稽俳句の作り方の基本に「正直」を私はあげていますが、素直な心を正直に綴ると、可愛くて楽しいのです。トヨさんの「百歳」という新句集の「がまぐち」という詩に素晴らしい家族愛を感じました。「がまぐち」は小学生の息子がアルバイトをして買ってくれたものでトヨさんのタカラモノになっているという詩です。

トヨさんの詩が翻訳されて、海外の人達にも読まれているのは、「失われた」ものを教えてくれるからです。お金では買えない宝物は何か、ということをです。「井泉」という、荻原井泉水の流れを汲む自由律の俳句雑誌で、「弟が帰ってきて家族で一年分笑う」という作品を読んだことを思い出しました。久しぶりの家族団欒が描かれていました。人々はお金では買えない大切なものに飢えているのです。

高橋 > 会長が、失われたものを教えてくれるという、トヨさんの詩、少しご紹介しておきますね。

「がまぐち」

毎年 お正月が来ると 思い出すの 当時 小学生だった倅が 納豆売りをして
買ってくれた 大きな がまぐち (中略) 私は忘れない がまぐちは 今でも
私の宝物 お金は貯まらなかったけれど やさしさは 今でもたくさん入っている

また、横道に逸れましたが、本日の本題に入らせて戴きます。季語は「瓢」です。「ひさご」とか「ふくべ」とか言われ、ユウガオ・ヒョウタン・トウガンなどの果実の内部をくりぬき乾燥させて、お酒など入れた容器ですね。半分に割って水を汲むひしゃくにもした様ですね。

順禮の目鼻書ゆくふくべかな 蕪村

腹の中へ齒はぬけけらし種ふくべ 蕪村

人の世に尻を居ゑたるふくべかな 蕪村

なにがしの殿に似たるよ種ふくべ 大江丸

世を捨てて瓢に入らんとぞ思ふ 紅線

ご解説よろしく願いいたします。

会長 > 「順禮の目鼻書ゆく・・・」、
巡礼は門づけですね。ふくべに蕪村が絵を描いていたのです。蕪村は画俳両道の才人でしたが、暮らしは楽ではありませんでした。ひょうたんに絵を描くのも仕事でした。巡礼が来たので描かせてみたのです。目と鼻を描いた。

「腹の中へ齒はぬけ・・・」、
瓢箪は種とりにするなら種を取り出す必要がありますが、中に落ち込んで取り出せない場合もあります。瓢箪を擬人化して 体型に見立てているのです。しかも「齒が落ちてしまった」と可笑しくしています。

「人の世に尻を居ゑ・・・」、
「尻を居ゑたる」は「据えたる」ですね。瓢箪の尻はふくよかで「どっしり」していますから、世の中に存在感をしめしているように見えます。

「なにがしの殿に似たるよ・・・」、
「なにがし」といえばすぐに「ああ、あの人」と共通理解ができる人物で、名前を具体的に言えない。しかし、身分は高いどちらかと言えば高貴なお方ということになります。その方の顔が種ふくべに似ているというのですから、詠んだ人には拍手喝采ですね。

「世を捨てて瓢に・・・」、
これは隠遁願望ですが、「瓢に入る」に謎かけがあります。酒を飲んで安穩に暮らすという願望なのです。

高橋 > なるほど。次の季語は「西瓜」です。そう言えば「西瓜」には会長が六十九歳の頃

感じたままを書いたと言われる童心の句がおありですね。

切り分けし西瓜の塔に種の窓 健

紅緑の滑稽集に参ります。

おれに似て尻の居はらぬ西瓜哉 角呂

ころげ出て吹矢をうけし西瓜哉 巢兆

風呂敷をしのびかねたる西瓜哉 春來

薄月夜西瓜を盗む心あり 子規

物もいはで喰ひついたる西瓜哉 子規

会長 > 私の句の「切り分けし西瓜の塔・・・」は、切り分けた西瓜は塔のように見えますね。種は窓なんだと感じたわけです。まあ童心でしょうね。

紅緑の滑稽集に行きましょう。

「おれに似て尻の・・・」、俳句は自嘲ですね。「尻の居はらぬ」とは、いつまでも、物事の決着をつけないということです。西瓜は「うらなり」まで花を順次つけてゆく。先端をとめぬ限り伸び続けますから。

「ころげ出て吹矢を・・・」、吹き矢の的にされましたね。吹矢でねらっている。西瓜が勝手に転げ出したように言っていますが、本当は違いますね。

「風呂敷をしのびかね・・・」、西瓜をひそかに持ち運ぶ必要があったのですね。途中で風呂敷がほどけて、西瓜が飛び出したということでしょう。

「薄月夜西瓜を盗む・・・」、西瓜泥棒は満月の夜は明る過ぎ。かと言って、新月では暗くて仕事がしにくいために、薄月がよろしいということですね。

「物もいはで喰ひ・・・」、西瓜を食べる時はこんなものですね。

高橋 > ウィットに富んだご解説、面白いですね。次の季語は、「南京」「稲」「落穂」です。

唐茄子と名に唱はれてゆがみけり 漱石

座禪して南京の尻のくさりけり 紅緑

稲たんにつけてみぢかし馬の首 乙二

落穂拾ひ鶉の糞は捨てにけり 鬼貫

会長 > 「唐茄子と名に唱はれ・・・」、
唐茄子はカボチャのことですね。かぼちゃ野郎という表現があるように、醜い顔の男を嘲って言う言葉です。かぼちゃと呼ばれずに唐茄子と呼ばれるので、拗ねてゆがんだということですね。漱石の創作能力は凄いですね。

「座禪して南京の尻・・・」、
南京はやはりカボチャのことです。地表に安定感良く座禅でもしているように見えるのです。長く地表に接していると腐りますね。

「稲たんにつけて・・・」、
稲の束を馬に負わせて運ぶ風景です。首の部分に振り分けにしたのです。頭だけが見える妙な格好ですが馬自身は、そのことを知らない可笑しさですね。

「落穂拾ひ鶉の糞・・・」、
稲穂と思って拾ったのが鶉の糞だったのです。

高橋 > 有難うございました。これで、秋の植物の部は終わりです。次は「秋動物」の部、季語は「鹿」と「雁」ですよ。それでは、百九年前の滑稽句に参ります。

とある木の間鹿に驚く鹿も驚く 虚子

又来たと烏思ふや小田の雁 支考

小便をすれば立けり小田の雁 砂金

初雁や芒はまねく人は追ふ 一茶

会長 > 「とある木の間・・・」、
木の間には鹿を見つけて驚いた。間近だったのでしょう。鹿の方も驚いたのだと。

「又来たと烏思ふや・・・」、
「小田」は小さな田という意味です。烏は年中いるので自分の縄張りですが、晩秋になるとやってくる雁を見て、また来たとかラスが思うのです。

「小便をすれば・・・」、
肥料になるからと用足しを田んぼにしたのです。雁が驚いて一斉に飛び立ったので
す。雁は鴨の仲間で鴨より一回り大きい鳥です。

「初雁や芒はまねく・・・」、
ススキの穂が手招きしているのに、なぜ人は雁を追い払うのだと一茶は言っていま
す。ススキと人間を対等に比較できるのが、一茶の素晴らしさですね。しかも一茶は
ススキに学べと言わぬばかりに…。

高橋 > 成る程、面白いお話ですね。有難うございました。次の季語は「蛇入穴」です。ご解
説下さいね。

世の中を這入かねてや蛇の穴 維然

をくれ蛇土龍の穴はいかならん 長翠

会長 > 「世の中を這入かねて・・・」、
穴に入り損ね俗世に慣れし蛇ですね。

「をくれ蛇土龍の穴は・・・」、
入る穴がなくなった蛇に「もぐら」の穴はいかがですかと、提案しています。

高橋 > 今日も為になる面白いご解説、有難うございました。

百九年前の滑稽句を通して、その時代の人々の考えにまた、一步近づけたような
気がします。お時間となってしまいましたが、本日の季語を用いての浪曲調の一
句、最後にお願ひ出来たらと思います。

会長 > お任せください。

♪唐茄子とおお 呼ばれし南瓜ああ ハロウィンのおおお 主役に抜擢されえにけり
へボと呼ばれし茄子胡瓜いいい 盆には仏壇の主役とおおおなる♪